

ダニエル書6章「獅子の穴からの救い」

1A 優れた霊による働き 1-9

1B 忠実な公務 1-5

2B 王のみへの祈願 6-9

2A 人の悪巧み 10-18

1B いつもと変わらない祈り 10-11

2B 王の憂い 12-18

3A 信頼する者への救い 19-28

1B 無実の証明 19-24

2B 永遠の主権者の証し 25-28

本文

ダニエル書 6 章を開きましょう。6 章において、ついにダニエルの生涯の最後の部分になります。7 章からは、ダニエル自身が受けた夢や幻が書かれていて、預言が中心です。6 章は、1 章からずっと見てきたダニエルの生涯の集大成とも言うべき出来事が書かれています。「獅子の穴からの救い」です。主に仕え、そして異教徒である王に仕えながら、受ける試練があります。しかし、主は必ず、その試練から救い出してくださるということです。

前回私たちは、バビロンが倒れたところまでを読みました。「5:31 そして、メディア人ダレイオスが、およそ六十二歳でその国を受け継いだ。」とあります。時は紀元前 539 年から 537 年辺りの話です。バビロンからペルシアに国の権限が移りました。ダレイオスというのは、人の名前ではなく称号と言われています。エジプト王が「ファラオ」と呼ばれているのと同じです。彼は歴史上で、「ゴブリュアス(Gobryas)」または「グバル(Gubaru)」と言われている人で、キュロス王の総督であったと言われています。キュロス王がアケメネス朝ペルシアを始める前に、暫定的にダレイオスが国を担ったそうです。彼は 62 歳でしたが数年後に死んだと言われており、それでキュロスが王となりました。

1A 優れた霊による働き 1-9

1B 忠実な公務 1-5

¹ ダレイオスは、全国に任地を持つ百二十人の太守を任命して国を治めさせるのがよいと思った。

² 彼はまた、彼らの上にダニエルを含む三人の大臣を置いた。これは、太守たちがこの三人に報告を行い、王が損害を被らないようにするためであった。

ペルシアは、どのようにしてこの広大な国を治めるかということについて、120 人の太守を任命し

ました。サトラピ(satrap)と一般の歴史では呼ばれます。そしてダレイオスと太守たちとの間にさらに、大臣を三人置いて、彼が直接太守たちからの報告を受けなくてもよいようにしました。その中の一人にダニエルがいます。たとえ政権や王朝が変わっても、前政権の公務員を登用することは賢いことです。実務能力があるので、即戦力があります。

2B 王のみへの祈願 6-9

³ さて、このダニエルは、ほかの大臣や太守よりも際立って秀でていた。彼のうちにすぐれた霊が宿っていたからであった。そこで王は、彼を任命して全国を治めさせようと思った。

彼には、「すぐれた霊が宿って」いました。神の聖なる霊であります。これが彼の生涯の特徴でありました。ネブカドネツアルが夢を見て、心が騒ぎ、解き明かしのためにバビロンの知者を連れて来させましたが、彼らはその解き明かしを知らせることはできませんでした。しかし、知者たちの長であるダニエルが最後に、連れて来られました。そしてネブカドネツアルは、こう言うのです。「4:18 私の国の知者たちはだれも、その意味を私に告げることができない。しかし、おまえにはできる。おまえには、聖なる神の霊があるからだ。」聖なる神の霊があると評しました。これが、すぐれた霊です。神は私たちに霊を創ってくださり、その霊が神の御霊によって結ばれている時、すぐれた霊となっています。

ダニエルはどのようにして、すぐれた霊を保っていたのでしょうか？ 私たちは、彼の生涯を見てきました。その特徴的な姿は、「心に定める」決意でありました。「1:8 ダニエルは、王が食べるごちそうや王が飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定めた。そして、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願うことにした。」とありました。王の食べるごちそうは偶像に献げられた肉がありました。彼は、主を第一にして、自分自身を主に生ける供え物として捧げていた生活を送っていました。

そして、ダニエルは祈りの人でした。まず、危機の時に祈りました。試みに遭った時に祈りました。ネブカドネツアルが、夢と夢の解き明かしを知者たちができないと言った時に、知者たちをみな殺せと命じました。ダニエルが思慮をもって対応し、そして解き明かしをするので時間の猶予を下さるようにお願しました。そして夜中に友人たちと共に祈ったのです(2:17-18)。そして、危機の時だけでなく、日頃から祈っていました。後で出てきますが彼は一日に三度の祈りを献げていました。

それで、ダニエルをダレイオスは総理大臣にしました。彼は忠実であるという言葉が4節にあります。そして後で、ダレイオスは、天の神のことをダニエルが「いつも仕えている神」と言います。今はかなり老いているダニエルであります。そこには風格があったことでしょう。王に仕えることについても、そして生涯、天の神に仕えることについてもそこに一貫性、忠実さがありました。能力があることではなく、任されたことに対して忠実であるかどうか、であります。イエス様がタラントの喩えで、「マタ 25:21 よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多く

の物を任せよう。」と主人が言ったとおりです。御父からすべてを任されたイエス様の特徴こそが、「忠実」また「真実」でありました(黙示 19:11 等)。父なる神を忠実に証言されたからこそ、大きなものを任されたのです。

⁴ 大臣や太守たちは、国政についてダニエルを訴える口実を見つけようとしたが、何の口実も欠点も見つけれなかった。彼は忠実で、何の怠慢も欠点も見つからなかったのである。⁵ そこでこの人たちは言った。「われわれはこのダニエルを訴えるための、いかなる口実も見つけれない。彼の神の律法のことで見つかるしかない。」

驚くべきことがここに書いてあります。「何の口実も欠点も見つけれなかった。」ということです。これは、完全無欠ということではなく、公務において非難されることがないということです。教会の監督にも、同じような特徴が書かれています。「1 テモ 3:2-4 ですから監督は、非難されるところがなく、一人の妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、礼儀正しく、よくもてなし、教える能力があり、3 酒飲みでなく、乱暴でなく、柔和で、争わず、金銭に無欲で、4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人でなければなりません。」人々を治める務めですから、このように非難されることがない人、ということです。

そして、「彼の神の律法のことで見つかるしかない。」とあります。ここも重要です。ダニエルは、異教の国の王に仕えていました。その忠実さは、異邦人である人々も認めざるを得ませんでした。しかし、その忠実さは、主への深い献身があるからです。神を恐れるからこそ、王を敬うことができました。主にお仕えするからこそ、王にも仕えることができました。イエス・キリストへの深い信頼、献身があるから、それで心から異教の主人にも忠実に従えるのだということです。ですから、迫害を受ける時には、自分の欠点や罪ではなく、あくまでも「義のために迫害される」「イエスの名のために迫害される」ということになるのです。

ところで、イエス様ご自身も同じようにして訴えられました。ユダヤ人のサンヘドリンにおいて、商人たちがやって来て、あることないこと告訴しましたが、何ら証拠を持ってくることはできませんでした。唯一、イエス様を有罪にすることができたのは、イエス様が、ご自身が神の御子キリストであると言われたことによってです。イエス様が、神が父としてあがめ、この方を証しておられた、その一つになっているつながりこそが、訴えの理由となりました。

⁶ それでこの大臣と太守たちは、王のもとに押しかけて来て、こう言った。「ダレイオス王よ、永遠に生きられますように。⁷ 王よ。国中の大臣、長官、太守、顧問、総督はみな、王が一つの法令を制定し、断固たる禁令を出していただくことに同意しました。すなわち今から三十日間、王よ、いかなる神にでも人にでも、あなた以外に祈願をする者は、だれでも獅子の穴に投げ込まれる、と。

次に出て来ますが、ダニエルが日課として、自分の神、エルサレムの神に祈っているのを大臣と太守たちは知っていました。彼は、王の公務という激務の中で、それでも一日に三回、自分の家に戻って祈りを捧げていたのです。それで、彼がそれを行なうこと自体が違反するような法令を、彼らは王の前に提出しました。

彼らは狡猾です。まず、「国中の大臣、長官、太守、顧問、総督はみな」と言っていますが、果たして全員がこの法令の内容を知って同意したのか、甚だ疑問です。そして、ダニエル以外の者たちはほぼ全員が異教徒ですから、王に祈願するということに対して変なことだと思わなかったのでしょうか。この法令の真の意図は知る由もありません。当時、異教徒の王として自分に祈願されるということは、自分に対する忠誠を示すものでした。ネブカドネツアルのことを思い出してください。彼が金の像を立てて、それにひれ伏させましたが、それは彼に権力を集中させるためでした。

⁸ 王よ、今、その禁令を制定し、変更されることのないようにその文書に署名し、取り消しのできないメディアとペルシアの法律としてください。」⁹ そこで、ダレイオス王はその禁令の文書に署名した。

バビロンが、人の像の夢の中で金の頭であり、メディア・ペルシアが銀の胸と両腕だったことを思い出してください。ネブカドネツアルは絶対的な権力を持っていました。自分の語ることがすなわち法律でした。しかしペルシアにおいては、王が署名するけれども、王であっても法令についてそれを破ることはできない、そして変更できないという拘束力を持つものです。今の法治国家のそれと似たような法体系を持っていたようです。

2A 人の悪巧み 10-18

1B いつもと変わらない祈り 10-11

¹⁰ ダニエルは、その文書に署名されたことを知って自分の家に帰った。その屋上の部屋はエルサレムの方角に窓が開いていた。彼は以前からしていたように、日に三度ひざまずき、自分の神の前に祈って感謝をささげていた。¹¹ すると、この者たちが押しかけて来て、ダニエルが神に祈り求め、哀願しているのを見つけた。

ダニエルは、署名がされたのを知って、それで自分の家で祈っています。これまでダニエルと友人三人の生涯で見てきたように、彼らは王を敬い、王に仕えていましたが、その奉仕と証しの基となっている、主に対する献身や礼拝、祈りに対して介入してくるのであれば、主に従います。偶像に献げられた肉であれば、それがたとえ王からのものであっても、拒みます。友人三人が、金の像にひれ伏すのを拒みました。ペテロが言った言葉、「使 5:29 人に従うより、神に従うべきです。」があります。

「その屋上の部屋はエルサレムの方角に窓が開いていた。」とあります。明らかに、ダレイオスで

はない神、エルサレムにかつてあった神殿に向かって祈っています。これで、法令に抵触することを彼らは確認しました。

ところで、なぜダニエルが、エルサレムに窓を開けて祈っていたのか？ダニエルは、主に従うために心を定めていた人、祈りの人だけでなく、みことばの人でありました。彼が生きていた頃から420年ぐらい前の聖書の記録にさかのぼります。ソロモンが神殿の建築を終えて、その奉献を行なったときとても大切な祈りを捧げました。列王記第一8章にあります。なぜ神殿を建てたのか？この所に向かっていの祈りを聞いてください、と彼は祈ったのです。モーセがかつて、このようなことを行なえば神は呪われると言ったその具体例をいろいろ出しています。そしてその罪を犯した時に、悔い改めと罪の赦しの願いをこの神殿に向けてささげるとき、祈りを聞いてください、と言っています。「Ⅰ列王 8:48-50 捕らわれて行った敵国で、心のすべて、たましいのすべてをもって、あなたに立ち返り、あなたが彼らの先祖にお与えになった彼らの地、あなたがお選びになったこの都、私が御名のために建てたこの宮に向かって、あなたに祈るなら、49 あなたの御座が据えられた場所である天で、彼らの祈りと願いを聞き、彼らの訴えをかなえて、50 あなたの前に罪ある者となったあなたの民を赦し、あなたに背いた、彼らのすべての背きを赦し、彼らを捕らえて行った者たちの前で彼らをあわれみ、その者たちがあなたの民をあわれむようにしてください。」ダニエルは、これを文字通りに行っていたのです。

彼がどのような祈りを献げていたのか？9章を見ると分かります。このダレイオスが王になって第一年の時に、彼はエレミヤの預言も読んでいました。そこに、エルサレムの荒廢の期間は七十であることをエレミヤ書から悟ったとあります。その預言にも、祈り求めることによる幸いについて約束されています。七十年が定められていることが書かれています。将来と希望を与える神のご計画があり、それは離散のユダヤ人が帰還することができるものだということです。そこには、「エレ 29:12-13 あなたがたがわたしに呼びかけ、来て、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに耳を傾ける。13 あなたがたがわたしを捜し求めるとき、心を尽くしてわたしを求めるとき、わたしを見つかる。」とあります。ダニエルは、神のみことばに従い、祈り、捜し求め、また罪を赦していただく祈りをやめることはできなかったのです。祈りをやめて、神に罪を犯すことができなかったのです。

2B 王の憂い 12-18

¹² そこで彼らは王の前に進み出て、王の禁令について言った。「王よ。王は今から三十日間、いかなる神にでも人にでも、あなた以外に祈願をする者は、だれでも獅子の穴に投げ込まれるという禁令に、署名されたものではありませんか。」王は答えた。「取り消しのできないメディアとペルシアの法律がそうであるように、そのことは確かである。」¹³ そこで、彼らは王に告げた。「王よ。ユダからの捕虜の一人ダニエルは、あなたと、ご署名になった禁令を無視して、日に三度、自分勝手な祈願をしております。」

彼らが王の所にやって来た時に、その法令について確認させました。王は、ダニエルを罾に陥れるためにこんな法令に署名をさせたのか、この時点まで気づいていませんでした。

¹⁴ このことを聞いて王は非常に憂い、ダニエルを救おうと気遣った。そして彼を助け出そうと、日没まで手を尽くした。¹⁵ そのとき、あの者たちが王のもとに押しかけて来て、王に言った。「王よ。王が制定したいかなる禁令や法令も、決して変更されることはないということが、メディアとペルシアの法律であることをご承知ください。」

ダレイオスは、ダニエルを非常に愛し、尊敬していました。これまで、ダニエルが、王や侍従に愛され、好意が持たれていたことを思い出してください。ここで、まさか自分の手で彼を殺すようなことになるとはと、非常に憂えて、救おうと決心して、夕暮れまで努力していました。法令に抜け穴がないか、調べていたのです。しかし、彼らの妬みは恐ろしいですね。けれども、「彼らは何としてでも、ダニエルの血を流したいと思っていたのです。イエス様のことを総督ピラトに追い詰める、ユダヤ人指導者たちも、妬みにかられました。

¹⁶ それで王は命令を出し、ダニエルは連れて来られて、獅子の穴に投げ込まれた。王はダニエルに話しかけて言った。「おまえがいつも仕えている神が、おまえをお救いになるように。」

ダニエルがダレイオスに神の証しをしていたことが分かります。「あなたのいつも仕えている神が」と、ダニエルが仕えている神について知っているからです。すばらしい証しです。そして、ダニエルをこの神に託したのです。この神が、彼を救ってくださるようにと言っています。

¹⁷ 一つの石が運ばれて来て、その穴の口に置かれた。王は王自身の印と貴族たちの印でそれを封印し、ダニエルについての処置が変えられないようにした。¹⁸ こうして王は宮殿に帰り、一晩中断食をした。側女も召し寄せず、眠ることもしなかった。

石を置き、王の印、貴人の印で封印しているのは、たとえ王であってもその法令は変えることのできないものであることを確認するものです。そして、ダニエルのことを非常に心配し、彼の事でかなり苦しんでいます。

ところで、ここで石を穴の口において、封をするというところで思い出すことがあります。そうです、イエス様の埋葬です。ユダヤ人指導者が、イエスの弟子たちが死体を盗み出さだろうと言ったので、ローマ総督ピラトが、番兵を出して、石に封印をし、番兵が墓の番をしました(マタイ 27:66)。そして実は、ダニエル書 6 章にある話全体が、私たちの主イエス・キリストの復活を指し示していることが分かります。イエス様が父なる神とご自身を一つにしたため、妬みをもった宗教指導者たちがローマに訴えて、それで十字架に付けさせました。そして印を押して墓に収めます。

旧約の時代から、主に仕えるしもべたちが、キリストの復活を証していることがあります。ヨブは重い皮膚病にかかり、もう死んでしまうかもしれないと覚悟していました。けれども、突然、信仰をもってこう表明します。「ヨブ 19:25-26 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついには、土のちりの上に立たれることを。26 私の皮がこのように剥ぎ取られた後に、私は私の肉から神を見る。」自分自身が復活するけれども、贖い主をこの目で見るのだと言っています。ヨセフもそうでした。彼は兄に売られて、エジプトに行ってしまいました。父ヤコブは、ヨセフは死んでしまったと思いましたが、再びヤコブがヨセフを見る時は、なんとエジプトの王の次に権威のある者であったのです。

キリストの御霊を持っている者たちが、どのような形であれ、キリストの苦しみあずかり、そして復活の力を証していくという召しがあります。「ピリ 3:10-11 私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、11 何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」

3A 信頼する者への救い 19-28

1B 無実の証明 19-24

¹⁹ 王は夜明けに日が輝き出すとすぐ、獅子の穴へ急いで行った。²⁰ その穴に近づくと、王はダニエルに悲痛な声で呼びかけ、こうダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエルよ。おまえがいつも仕えている神は、おまえを獅子から救うことができたか。」

ずっと眠れず、夜が完全に明けるのを待たず、王が獅子の穴にやって来ました。ここも、夜明けにイエス様の墓に行った女たちと似ていますね。そして、おそらくはもうだめだと分かりつつも、僅かな期待をもってダニエルに語りかけました。

ここでも、彼がいかにダニエルの証しに影響されているかが分かります。「生ける神のしもべ」そして、「あなたがいつも仕えている神」です。ダレイオスは自分の仕えている神々、偶像は生きていないことを知っていました。ダニエルの神は目に見えないけれども、けれども、生きていることをダニエルの生活を通して目撃していました。

²¹ するとダニエルは王に語った。「王よ、永遠に生きられますように。²² 私の神が御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の危害も加えませんでした。それは、神の前に私が潔白であることが認められたからです。王よ、あなたに対しても、私は何も悪いことはしていません。」

ダニエルは救われました。まず、ダニエルに遣わされた御使いは、もしかしたら、ダニエルの友人三人を燃える火の炉の中ですべてにおられた、神の御子キリストと同じかもしれません。そしてダ

ニエルのことを考えてでしょう、ヘブル書の著者が信仰の人々を列挙していった時に、「ししの口をふさぎ(11:33)」と言っています。

そして、彼は王に罪を犯していないことを話していますね、「神の前に私が潔白であることが認められたからです。王よ、あなたに対しても、私は何も悪いことはしていません。」と言っています。王に対して罪を犯していないのだから、この刑罰から救われるはずだ、神はその力を与えられるという信仰です。そうです、罪に対しては死という報酬がありますが、義に対しては命という報酬があります。イエス様は、罪を犯されていないのに十字架に付けられました。そこには、私たちの身代わりとして、その罪のために死なれましたが、しかし主ご自身が罪のないこと、義であることが復活によって証明されたのです。実にダニエルの獅子の穴の救いは、主イエスご自身の復活を表しています。そして、キリストはその義を私たちに神の恵みによってまとわせてくださるのです。「ロマ 4:25 主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。」

²³ 王は大いに喜び、ダニエルをその穴から引き上げるように命じた。ダニエルは穴から引き上げられたが、彼に何の傷も認められなかった。彼が神に信頼していたからである。

ダニエルが神を信頼していました。自分で自分を救うのではなく、自分自身は神の御心を行なうことに専念して、救いは神が行なってくださいという信頼であります。これもまた、主ご自身がゲッセマネの園のおける祈りで、父なる神を信頼した救いでありました。「ヘブル 5:7 キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。」私たちも、キリストの十字架によって罪赦され、そして主が甦られたことを信じる信仰によって、義と認められ、死からの救い、復活の希望が与えられます。日々の生活の中で、自分に対する死というものがあります。しかし、その弱さをキリストにあって経ていくことで、かえってキリストの命が私たちに現れます。そして、肉体の死においても、終わりの日に、キリストにあって体のよみがえりをいただくのです。

²⁴ 王が命じたので、ダニエルを中傷した者たちが連れて来られて、その妻子とともに獅子の穴に投げ込まれた。彼らが穴の底に達しないうちに、獅子は彼らをわがものにして、その骨をことごとくかみ砕いてしまった。

ここで別に、ダニエルが殺されなかったのが、獅子が空腹だったからだ、ということではなかったことが分かります。確実に御使いが止めていたからです。

2B 永遠の主権者の証し 25-28

²⁵ それから、ダレイオス王は、全土に住むすべての民族、国民、言語の者たちに次のように書き

送った。「あなたがたに平安が豊かにあるように。²⁶ 私はここに命じる。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震えおののけ。この方こそ生ける神、永遠におられる方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。²⁷ この方は人を救い、助け出し、天においても、地においても、しるしと奇跡を行われる。実に、獅子の手からダニエルを救い出された。」

ダニエル書 4 章における、ネブカドネツアルによる手紙と同じ内容をダレイオスも話しています。つまり、初めに、「あなたがたに平安が豊かにあるように。」から挨拶しています。そして、「ダニエルの神の前に震えおののけ」と命令しています。ダレイオスがネブカドネツアルのように、自分自身が神をほめたたえ、恐れていませんが、けれども、ダニエルの神は確実に生きているという証言を立てています。そして、人間の国々は興って倒れるけれども、神の御国は永遠に続きます。

私たちは、その神の国の中に入れられているのです。だから、この世界がどのように変わろうとも、私たちの証しは変わらず、確実に残ります。それから、神が人を救われる方であり、また徴と奇跡を行われる方であることを、称賛しています。

²⁸ このダニエルは、ダレイオスの治世とペルシア人キュロスの治世に栄えた。

先ほど話しましたように、ダレイオスの治世は暫定統治であり、彼がすぐに死んだと言われていますが、キュロス王がペルシアの初代王となり統治を始めました。その彼が、主によって霊が奮い立ち、イスラエルの神、主の御名によって、ユダにある宮を再建するように布告を出したのです。そして、再建のための資金はペルシアの国庫から予算振り分けによって行ないました。

その時、おそらく紀元 636 年ですが、その時までダニエルはいたのです。10 章には、キュロス王の第三年に幻が与えられています。紀元前 605 年から少なくとも 633 年辺りまで彼はいました。エレミヤが、神の怒りの器としてネブカドネツアルを用いると言って、七十年の期間が定められているということでありましたが、神はユダヤ人がエルサレムにいない期間、確実に生きておられることを、異教の王たちに働きかけて証しされていたのです。その中で、主が自分をこの地に置いておられるのだと、召命を受けて、その召命に忠実に応えていきました。

主が、皆さんをもその置かれているところに遣わしておられます。そして、そこで主に忠実に仕えます。そして、自分では知らない、気づかない、想定していないことかもしれないけれども、それでも主は働いておられます。そのことを信じるのです。